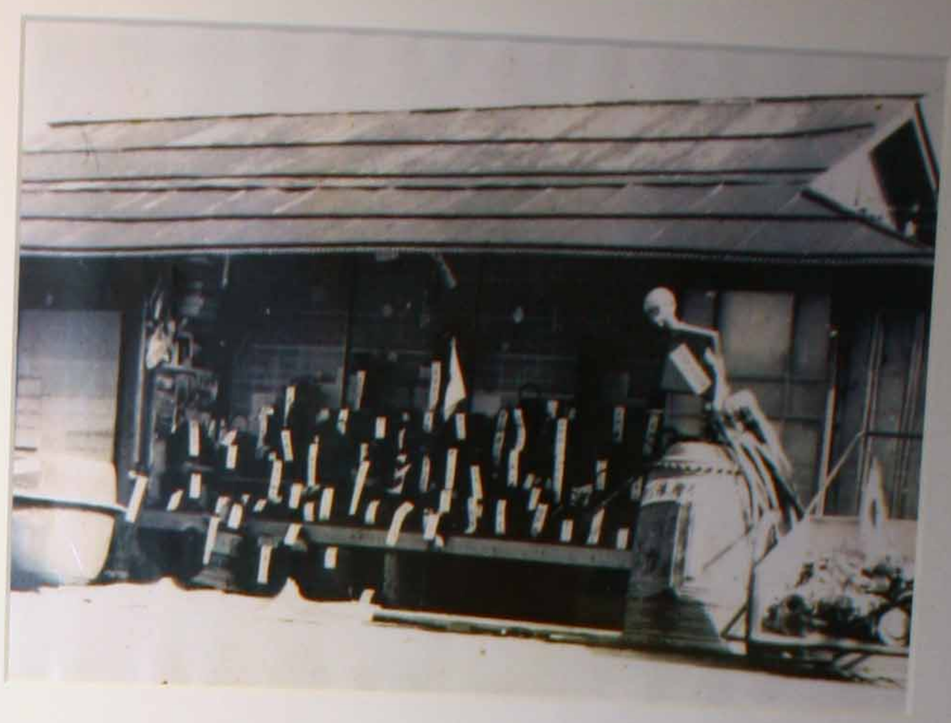
戦時中のくらし～銃後（じゅうご）の生活

軍隊で使う物資の供給を国民が支えることで戦争勝利を目指す。
銃後とは、銃を構えて戦う戦場の後方での生活をいう。

農作業をする人々 昭和18年（1943）葛城国民学校

昭和18年(1943)には労働力不足が深刻となり、それを補うために「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定され、農作業に加え、軍需関連工場での勤労奉仕等も行われるようになった。



供出された金属（鉄釜や鉄瓶がある）

米英撃滅必勝国民大会のようす

昭和16年（1941）西角田小学校講堂で行われた。「大政翼賛」「進め！一億火の玉だ」の文字が見える。

防火訓練 椎田駅前

昭和17年（1942）以降は日本本土でもアメリカ軍による空襲が見られるようになり、空襲に備えた防火訓練が行われるようになった。

防空訓練 昭和17年（1942）

綱敷天満宮前の砂浜で木製櫓を組んで行われ、参加者は全員女性。手にはバケツが握られている。

上下暗色系の服装は木綿製で、火災時は全身に水を被り濡れた状態にすることで火から体を守ることができるとされた。また、下半身に着用するズボン「もんぺ」の足元はよく見ると布紐で細く絞られており、これは足元から火の子が入らないための工夫だった。白黒写真なので明確な色はわからないが、暗色系の色は汚れが目立たないためだという。

大日本国防婦人会 昭和16年（1941）小原公民館前

大日本国防婦人会は満州事変後の昭和7年（1932）発足の大阪国防婦人会が発展した全国組織。「国防は台所から」をモットーに白い割烹着とタスキ掛けで労働奉仕を行った。